

2020 年度 学校評価報告書

(自己評価・授業評価・学校関係者評価及び次年度方針)

2021 年 3 月 31 日

大阪信愛学院中学校高等学校
学校評価委員会

はじめに

学校教育法及び同施行規則に基づき、本校において学校評価を実施するため、2021年1月に本校の教員、及び保護者に「学校自己評価アンケート」を実施した。また、生徒には「授業評価アンケート」をWeb配信し、結果を集約した。その後、中学校高等学校の保護者の代表役員、卒業生の代表役員、卒業生保護者の代表役員に学校関係者評価を実施していただいた。本文書は学校評価委員会が分析したものである。

本校の設立母体は、フランスに本部のある「ショファイユの幼きイエズス修道会」である。系列校は日本に4校あるが、系列校の中で保育園、幼稚園、小学校、中学校、高等学校そして短期大学を併設しているのは本校のみである。系列校の基本であるキリスト教的価値観に基づき、自分と他者を大切に、かけがえのない生命の尊さを体現し、隣人愛ゆえの国際教育、与えられたタレントを磨くことを実践している。

今回の学校評価は本校の現状及び課題を再認識する契機として位置づけ、伝統の上にたった変革を成し遂げるための有効な検証の手段としてとらえている。

1. 建学の精神

「キリストに信頼し、愛の実践に生きる」

1877年（明治10年）、フランスから派遣された4人のシスターたちは捨て子たちを養育することから始めた。それは「隣人を自分のように愛しなさい」というキリスト教的精神の表れである。その精神に従い、弱い者、困っている者、傷ついている者に手を差し伸べるという行為を実践した。

1884年（明治17年）、大阪の川口居留地に最初の女学校が創立された。信愛に集う生徒たちが建学の精神を体現し、社会に貢献することを目指す。

2. 教育目標

（1）キリスト教的価値観に基づく教育

人間はかけがえのない存在として造られ、自分の命と他者の命の尊厳を意識し、また与えられたタレントを最大限に磨き、誇りを持って自分の人生を築くよう促す。日々の朝礼のお祈り、黙想、聖書の授業、また地域社会との連携と奉仕、募金等を通して困っている人、弱い立場に置かれている人を意識することを学ぶ。

（2）一人ひとりが輝く教育

生徒が個性と主体性を尊重し、自分で考え、判断し、行動する力を育てすべての人に対して差別や偏見を持つことなく公平、公正にして、正義とゆるしの実践的態度を養う。

（3）能力の開発を目指す教育

絶えず自分の限界を越えて勉学し、知性の向上はもちろん、直観力、想像力、創造的思考力を伸長させ、芸術的感性を高めるとともに表現力を身につける。

（4）自己形成を促す教育

基本的な生活習慣を身につけ時と場合に応じて臨機応変な対応ができるよう国際的に共通するマナーを身につけ、探究心、開拓心、挑戦することのできる心を養い生涯学習への意欲を高める。

（5）社会貢献への態度を育成する教育

学校生活の中でよい共同体を築いていく上での協力の精神と日本の文化を学びつつ、グローバルな視点で世界に目を向け、民族、国籍、宗教を越えて、弱い人、困難な状況にある人への共感と各自の使命に目覚め、奉仕への開花していくよう促す。

3. 目指す教師像

教員の意識向上、及び組織の健全化を図るためにモチベーション・マネジメント制度（教員評価制度）を導入している。モチベーション・マネジメント制度は、学校目標を各学年・各分掌にブレイクダウンし、さらに各々の教員がそれに沿って目標を設定する。これによって、個人の目標と学校目標が連動し、学校目標が効率よく達成されることを目指したものである。年度始めに、自身が所属するリーダーと目標設定を行い、中間フォロー、学年末の振り返り面談等を通して、目標達成を目指すために個々がPDCAサイクルを回す。また、キャリアパスと各段階での役割を明確にすることで、組織の健全化を図る。このモチベーション・マネジメント制度の設計にあたり、「目指す教師像」を明文化し、それをもとに議論を進めた。以下に本校の目指す教師像を示す。

キリストに信頼し、愛の実践に生きる教師

〈生徒に対して〉

- ・生徒の無限の可能性を信じ、成功と失敗を通して成長を支える教師
- ・コミュニケーションを十分にとって信頼される教師
- ・温かさを持って、場面に応じて厳しく指導できる教師

〈チーム（組織・同僚）に対して〉

- ・学校の目標に向かって率先して行動し、協働する教師
- ・敬意、感謝、信頼をもって、お互いに言うべきことは言い合う教師
- ・コミュニケーションを十分にとって助け合う教師

〈自身に対して〉

- ・専門分野に精通し、授業力、指導力を高め続ける教師
- ・向上心を持って新しいことに挑戦しながら、振り返り、改善できる教師
- ・社会とつながり、広い視野をもち、新しい教育を追究する教師
- ・常に心が健やかな教師

4. 教育コンセプト

建学の精神、教育理念、教育方針、教育目標と、現代・これからを生きる生徒に必要な力を考え、以下の通り、教育コンセプトを設定している。

知識と技能を反復によって定着させた上で、現代を生きるために必要な〈学ぶ力〉〈心〉〈姿勢〉を育成する。

〈学ぶ力〉 **Academic skills**

探究力・学び続ける力・コミュニケーション力の3つの「学ぶ力」を育成する。

〈心〉 **Mind**

違いを受け入れ、かけがえのない存在であることを認め合う「心」を育成する。

〈姿勢〉 **Attitude**

先を見据える「姿勢」、自分の考えや行動を省み改善する「姿勢」を育成する。

5. 2020 年度（令和 2 年度）学校目標

建学の精神の具現化を目指し、本校の教育目標の達成と学院の発展を図るために、次の内容を重点目標に掲げた。

- （1）目指す教師像の実現
- （2）教育コンセプトの実現
- （3）ICT の活用充実
- （4）コース毎の学習習慣の改善・成績向上・進路実績向上
- （5）大学入試改革及び次期指導要領（中1対象）の対策・研究
- （6）入学者数の増員

2020 年度 学校目標と具体的方策及び評価指標

	評価項目	具体的方策	方策の評価指標
(1)	目指す教師像の実現	① モチベーション・マネジメント制度を振り返りさらなる意識向上を図る。 ② 教員研修を実施し、意識から行動への移行を図る。	年度始めと年度末に教員が自己評価を行い、各項目の評価向上が教員全体の 50%以上
(2)	教育コンセプトの実現	① 学校案内パンフレット・ホームページを通して明確に打ち出す。 ② 日々の SHR、学年集会、全体集会、保護者会を通して浸透を図る。 ③ 教育コンセプト実現させるために、各行事と結びつけ、振り返りを実施する。	・年度始めと年度末に教員による自己評価を行い、各項目の評価向上が教員全体の 50%以上 ・生徒による自己評価を行い、各項目 70%以上 ・保護者による学校評価アンケート該当項目 70%以上
(3)	ICT の活用充実	① iPad を教員に配当し、iPad や Chrome book を使った授業を実践し、研究または公開授業を行う。	・教員による学校評価アンケート該当項目 70%以上 ・保護者による学校評価アンケート該当項目 50%以上 ・生徒によるアンケート実施 50%以上
(4)	各コース毎の学習習慣の改善・成績向上・進路実績向上	① 学習習慣について Classi アンケートにて到達度自己評価を行うことで意識向上を図る。 ② 英検・GTEC スコア・漢検の各学年における指標を示し、生徒が率先して学習に取り組む姿勢をサポートする。 ③ 現状より一歩上を目指した進路を実現するための学習指導と進路指導を担任と教科担当者が密に連携して実現する。	年度中間と期末に生徒による自己評価を行い、各項目の評価向上が生徒全体の 70%以上 英検 中 1)4 級 80% 中 2)3 級 50% 中 3)文理Ⅰ・文理Ⅱ共に 3 級 80% 高 1)文理系準 2 級 50% その他 3 級 60% 高 2)文理系 2 級 60% その他 準 2 級 40% 高 3)文理系 2 級 80% その他 準 2 級 60% GTEC スコア平均を各学年 40 以上上昇 漢検 中 1)4 級 50%(5 級 100%) 中 2)4 級 100% 中 3)文理Ⅰ 3 級 100% 文理Ⅱ 3 級 50% 高 1)文理系準 2 級 50%(3 級 100%) ソレイユ・看護・子ども 3 級 50% 高 2)文理系準 2 級 100% ソレイユ・看護・子ども 3 級 100% 高 3)文理系 2 級 50% ソレイユ・看護・子ども 準 2 級 50% 国公立大) 合格者数 7 名 関関同立) 合格者数 30 名 産近甲龍・三女子大) 合格者数 30 名
(5)	次期学習指導要領に対する教育課程の検討・立案	委員会を設置し、教育課程を立案する。	・教員による学校評価アンケート該当項目 70%以上 ・保護者による学校評価アンケート該当項目 70%以上
(6)	入学者数の増員	① 本校の魅力を整理し、各種説明会、入試関連行事等でアピールを行う。 ② 高校の入試基準や中高の奨学生制度を改変する。 ③ 塾・中学校まわりを改善する。 ④ 各種イベント、広報の改善する。	入学者数 中学) 40 名以上 高校) 150 名以上

6. 2020 年度（令和 2 年度）学校評価アンケートと結果分析

アンケートは、7 分野 25 項目について行った。結果と分析は以下の通りである。分析は A（よくあてはまる）を+2、B（ややあてはまる）を+1、C（あまりあてはまらない）を-1、D（まったくあてはまらない）を-2 として、各評価 A～D の割合に乗じたものを下段にスコアとして中学と高校別に示した。スコア 0.8 以上のものを良好と考え、それ以下のものを要検討事項と考えた。また、教員と保護者との認識差が大きい項目に関しては、次のように印をつけている。「保護者の方が教員よりもスコアが 0.3 以上大きい場合は○、教員の方が保護者よりもスコアが 0.3 以上大きい場合は●」

A：信愛教育・教育コンセプトについて

評価項目		保護者					教員					
		A	B	C	D		A	B	C	D		
A: 信愛教育・教育コンセプトについて	1	〈学ぶ力〉 探究力・学び続ける力・コミュニケーション力の3つの「学ぶ力」が育成されている	25.9	60.7	12.0	1.4	%	22.0	75.6	2.4	0.0	%
			0%	20%	40%	60%	80%	100%	0%	20%	40%	60%
	2	〈心〉 違いを受け入れ、かけがえのない存在であることを認め合う「心」が育成されている。	34.2	55.6	8.8	1.4	%	34.1	58.5	7.3	0.0	%
			0%	20%	40%	60%	80%	100%	0%	20%	40%	60%
	3	〈姿勢〉 先を見据える「姿勢」、自分の考えや行動を省み改善する「姿勢」が育成されている。	28.5	55.8	14.5	1.1	%	14.6	68.3	17.1	0.0	%
			0%	20%	40%	60%	80%	100%	0%	20%	40%	60%

< 1 > ～ < 3 >

項目 番号	保護者											教員					
	中学					教員と保護 者の認識差	高校										教員と保護 者の認識差
	A(%)	B(%)	C(%)	D(%)	スコア		A(%)	B(%)	C(%)	D(%)	スコア	A(%)	B(%)	C(%)	D(%)	スコア	
1	20.8	67.9	11.3	0.0	0.98		26.8	59.4	12.1	1.7	0.98		22.0	75.6	2.4	0.0	1.17
2	20.8	67.9	7.5	3.8	0.94		36.6	53.4	9.1	1.0	1.15		34.1	58.5	7.3	0.0	1.20
3	20.8	62.3	17.0	0.0	0.87		29.9	54.7	14.1	1.3	0.98		14.6	68.3	17.1	0.0	0.80

3 項目とも保護者と教員において良好な結果が得られていると考えることができる。ただし、項目< 3 > の「姿勢」については、教員のスコアが 0.80 と良好な結果と言えるが改善の余地はあると考えており、これは取り組みの実感の希薄さが起因しているのではないかと推察する。各学年単位で施策の検討を行い、実行に移していくことも必要であると考え。

B：教科指導について

A:よくあてはまる B:ややあてはまる C:あまりあてはまらない D:まったくあてはまらない

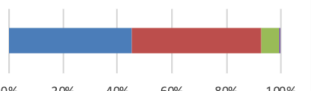
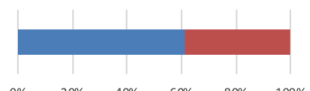
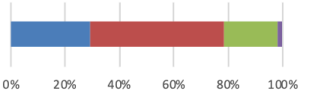
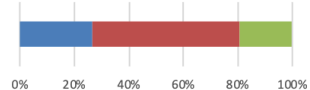
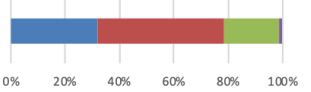
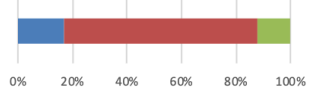
評価項目		保護者					教員				
B:教科指導について	4	必要な学力が定着、向上する授業が行われている	A	B	C	D		A	B	C	D
			23.4	55.0	19.1	2.6	%	17.1	75.6	7.3	0.0
			0% 20% 40% 60% 80% 100%					0% 20% 40% 60% 80% 100%			
	5	必要な学力が定着、向上する適切なコースやカリキュラムが設定されている	A	B	C	D		A	B	C	D
			27.4	54.7	16.0	2.0	%	14.6	70.7	12.2	2.4
			0% 20% 40% 60% 80% 100%					0% 20% 40% 60% 80% 100%			
	6	放課後や長期休業中に、講座や補習が必要に応じて行われている	A	B	C	D		A	B	C	D
			24.8	50.1	21.9	3.1	%	22.0	48.8	29.3	0.0
			0% 20% 40% 60% 80% 100%					0% 20% 40% 60% 80% 100%			
	7	学校として必要な国際教育が行われている	A	B	C	D		A	B	C	D
			26.2	52.7	18.5	2.6	%	34.1	53.7	12.2	0.0
			0% 20% 40% 60% 80% 100%					0% 20% 40% 60% 80% 100%			
	8	ICTを活用して学習効率を向上させる指導が行われている	A	B	C	D		A	B	C	D
			23.4	58.7	15.4	2.6	%	17.1	70.7	12.2	0.0
			0% 20% 40% 60% 80% 100%					0% 20% 40% 60% 80% 100%			

< 4 > ～ < 8 >

項目 番号	保護者												教員				
	中学					教員と保護者の認識差	高校					教員と保護者の認識差					
	A(%)	B(%)	C(%)	D(%)	スコア		A(%)	B(%)	C(%)	D(%)	スコア		A(%)	B(%)	C(%)	D(%)	スコア
4	20.8	52.8	24.5	1.9	0.66	●	23.8	55.4	18.1	2.7	0.80		17.1	75.6	7.3	0.0	1.02
5	24.5	56.6	18.9	0.0	0.87		27.9	54.4	15.4	2.3	0.90		14.6	70.7	12.2	2.4	0.83
6	18.9	54.7	20.8	5.7	0.60		25.8	49.3	22.1	2.7	0.73		22.0	48.8	29.3	0.0	0.63
7	24.5	58.5	11.3	5.7	0.85		26.5	51.7	19.8	2.0	0.81		34.1	53.7	12.2	0.0	1.10
8	20.8	56.6	18.9	3.8	0.72		23.8	59.1	14.8	2.3	0.87		17.1	70.7	12.2	0.0	0.93

中学校においては項目< 4 > < 6 > < 8 >、高校においては項目< 6 >、教員においても同様に項目< 6 >が要検討事項であると読み取れる。まず、全対象者に共通する項目< 6 >の改善は必須である。個々の教員、教科における補習は日々行われており、夏期講座も実施している。しかし、これだけでは不十分であるということを認識しなければならない結果である。早急に現行の補習体制の問題点を客観的な視点から洗い出し、改善を行う必要がある。項目< 4 >に関しても中学校は当然のこと、高等学校においても引き続き新しい学習指導要領及び大学入試制度を鑑みた各コース毎の授業の見直しが必要である。また、中学校においては同時に各教科におけるICT活用方法についても見直さなければならない。

C：教科外活動について

評価項目			保護者					教員				
			A	B	C	D		A	B	C	D	
C: 教科外活動について	9	部活動や生徒会活動が活発に行われている	45.0	47.6	6.8	0.6	%	61.0	39.0	0.0	0.0	%
												
			0% 20% 40% 60% 80% 100%					0% 20% 40% 60% 80% 100%				
	10	学校行事が充実している	29.3	49.0	19.7	2.0	%	26.8	53.7	19.5	0.0	%
												
			0% 20% 40% 60% 80% 100%					0% 20% 40% 60% 80% 100%				
	11	学内外の活動を通して、ボランティア精神を育む教育が行われている	31.9	46.7	19.9	1.4	%	17.1	70.7	12.2	0.0	%
												
			0% 20% 40% 60% 80% 100%					0% 20% 40% 60% 80% 100%				

< 9 > ～ < 1 1 >

項目 番号	保護者												教員				
	中学					教員と保護 者の認識差	高校					教員と保護 者の認識差					
	A(%)	B(%)	C(%)	D(%)	スコア		A(%)	B(%)	C(%)	D(%)	スコア		A(%)	B(%)	C(%)	D(%)	スコア
9	34.0	58.5	7.5	0.0	1.19	●	47.0	45.6	6.7	0.7	1.32		61.0	39.0	0.0	0.0	1.61
10	22.6	66.0	9.4	1.9	0.98		30.5	46.0	21.5	2.0	0.82		26.8	53.7	19.5	0.0	0.88
11	26.4	50.9	22.6	0.0	0.81		32.9	46.0	19.5	1.7	0.89		17.1	70.7	12.2	0.0	0.93

3 項目とも、保護者、教員共に良好な結果であると考えることができる。しかし、項目< 9 >に関しては、中学校の保護者と教員の間で認識の差が大きいことは留意しなければならない。

D：進路指導について

A:よくあてはまる B:ややあてはまる C:あまりあてはまらない D:まったくあてはまらない

評価項目			保護者					教員				
D: 進路指導について	12	生徒の希望に沿った進路指導が行われている	A	B	C	D		A	B	C	D	
			31.9	49.0	15.7	3.4	%	39.0	58.5	2.4	0.0	%
	13	進路説明会や進路プログラム、キャリア教育等が、 生徒が将来を考えることのできる内容になっている	A	B	C	D		A	B	C	D	
			27.9	57.0	13.1	2.0	%	39.0	53.7	7.3	0.0	%
	14	大学入試改革に対応した適切な指導(英語四技能・キャリアパスポート等を含む)が行われている	A	B	C	D		A	B	C	D	
			24.5	58.1	14.8	2.6	%	26.8	70.7	2.4	0.0	%

< 1 2 > ~ < 1 4 >

項目 番号	保護者												教員				
	中学					教員と保護 者の認識差	高校					教員と保護 者の認識差					
	A(%)	B(%)	C(%)	D(%)	スコア		A(%)	B(%)	C(%)	D(%)	スコア		A(%)	B(%)	C(%)	D(%)	スコア
12	15.1	67.9	15.1	1.9	0.79	●	34.9	45.6	15.8	3.7	0.92	●	39.0	58.5	2.4	0.0	1.34
13	11.3	71.7	15.1	1.9	0.75	●	30.9	54.4	12.8	2.0	0.99		39.0	53.7	7.3	0.0	1.24
14	13.2	66.0	18.9	1.9	0.70	●	26.5	56.7	14.1	2.7	0.90	●	26.8	70.7	2.4	0.0	1.22

3項目とも、中学校において要検討事項であることが読み取れる。保護者と教員の認識の差も大きい。ただ、設問自体が高等学校を主体とした内容になっていることにも留意したい。そのため、中学校における項目< 1 2 > < 1 3 > に関しては「進路指導とは何か」「進路プログラム・キャリア教育とは何か」をしっかりと明確化し、生徒・保護者に周知して実施していく必要がある。ただ、項目< 1 4 > に関しては英語四技能の育成やキャリアパスポートの取り組みに関して見直しが必要であると考え。高等学校においても項目< 1 2 > < 1 4 > に関しては保護者との認識の差が大きいことは留意したい。

E：生徒指導について

A:よくあてはまる B:ややあてはまる C:あまりあてはまらない D:まったくあてはまらない

評価項目			保護者					教員				
E:生徒指導について	15	教員の生徒指導や生徒への関わりが適切に行われている	A	B	C	D		A	B	C	D	
			33.9	49.0	14.0	3.1	%	41.5	56.1	2.4	0.0	%
	16	校内におけるいじめの早期発見、防止が適切に行われている	A	B	C	D		A	B	C	D	
			27.1	52.7	16.0	4.3	%	19.5	78.0	2.4	0.0	%
	17	生徒一人ひとりに対し、必要に応じて適切な支援が行われている	A	B	C	D		A	B	C	D	
			32.2	49.6	15.4	2.8	%	26.8	70.7	2.4	0.0	%

< 1 5 > ～ < 1 7 >

項目 番号	保護者												教員				
	中学					教員と保護 者の認識差	高校					教員と保護 者の認識差					
	A(%)	B(%)	C(%)	D(%)	スコア		A(%)	B(%)	C(%)	D(%)	スコア		A(%)	B(%)	C(%)	D(%)	スコア
15	28.3	50.9	15.1	5.7	0.81	●	34.9	48.7	13.8	2.7	0.99	●	41.5	56.1	2.4	0.0	1.37
16	20.8	50.9	18.9	9.4	0.55	●	28.2	53.0	15.4	3.4	0.87		19.5	78.0	2.4	0.0	1.15
17	28.3	45.3	18.9	7.5	0.68	●	32.9	50.3	14.8	2.0	0.97		26.8	70.7	2.4	0.0	1.22

項目< 1 6 > < 1 7 >に関して、中学校において要検討事項であると読み取れる。また、保護者と教員の認識の差も大きい。特に項目< 1 6 >は全項目の中で最も低いスコアとなっていることにも留意したい。いじめを含めた友人間の諸問題の調査をさらに徹底し、調査実施報告を保護者に周知したりすることも検討したい。また、いじめ防止や生徒への適切な支援についての教員研修も必要と考える。項目< 1 5 >はスコアとしては良好であるが、中高ともに保護者と教員の認識の差が大きいことは留意したい。

F：保護者と学校との連携について

A:よくあてはまる B:ややあてはまる C:あまりあてはまらない D:まったくあてはまらない

評価項目			保護者					教員				
F:保護者と学校との連携について	18	各種行事の案内が適宜行われている	A	B	C	D		A	B	C	D	
			43.0	49.0	6.6	1.4	%	36.6	63.4	0.0	0.0	%
	19	学校のホームページが充実している	A	B	C	D		A	B	C	D	
			30.5	51.6	15.1	2.8	%	26.8	63.4	9.8	0.0	%
	20	Classiを使用した連絡が、適切に運用されている	A	B	C	D		A	B	C	D	
			55.6	38.7	5.1	0.6	%	48.8	51.2	0.0	0.0	%
	21	保護者説明会・個人懇談の内容、回数が適切である	A	B	C	D		A	B	C	D	
			45.0	45.6	9.1	0.3	%	31.7	65.9	2.4	0.0	%

< 1 8 > ~ < 2 1 >

項目 番号	保護者												教員				
	中学					教員と保護 者の認識差	高校					教員と保護 者の認識差					
	A(%)	B(%)	C(%)	D(%)	スコア		A(%)	B(%)	C(%)	D(%)	スコア		A(%)	B(%)	C(%)	D(%)	スコア
18	43.4	41.5	13.2	1.9	1.11		43.0	50.3	5.4	1.3	1.28		36.6	63.4	0.0	0.0	1.37
19	28.3	47.2	22.6	1.9	0.77		30.9	52.3	13.8	3.0	0.94		26.8	63.4	9.8	0.0	1.07
20	58.5	28.3	11.3	1.9	1.30		55.0	40.6	4.0	0.3	1.46		48.8	51.2	0.0	0.0	1.49
21	41.5	52.8	5.7	0.0	1.30		45.6	44.3	9.7	0.3	1.25		31.7	65.9	2.4	0.0	1.27

項目< 1 9 >に関して、中学校において要検討事項であると読み取れる。また、良好な結果ではあるが、高等学校においても本関連項目の中で項目< 1 9 >のスコアが他と比べて低くなっている。ホームページに関しては運用2年目が経過し、各方面からのご意見をいただいているため、改良を行う予定である。

G：学校運営：開かれた学校づくり

評価項目			保護者					教員				
			A	B	C	D		A	B	C	D	
G:施設設備について、全般	22	学校内の施設や設備が適切に運用されている	37.9	53.6	7.7	0.9	%	19.5	70.7	7.3	2.4	%
	23	避難訓練等、学校の日常の危機管理対策が適切である	32.5	57.3	8.8	1.4	%	14.6	63.4	22.0	0.0	%
	24	電話や受付での応対が適切である	48.7	42.7	6.6	2.0	%	12.2	70.7	17.1	0.0	%
	25	信愛学院の教育に満足している	42.2	47.9	8.5	1.4	%	12.2	70.7	17.1	0.0	%

< 2 2 > ～ < 2 5 >

項目 番号	保護者												教員				
	中学					教員と保護 者の認識差	高校					教員と保護 者の認識差					
	A(%)	B(%)	C(%)	D(%)	スコア		A(%)	B(%)	C(%)	D(%)	スコア		A(%)	B(%)	C(%)	D(%)	スコア
22	43.4	45.3	7.5	3.8	1.17		36.9	55.0	7.7	0.3	1.20		19.5	70.7	7.3	2.4	0.98
23	37.7	49.1	11.3	1.9	1.09	○	31.5	58.7	8.4	1.3	1.11	○	14.6	63.4	22.0	0.0	0.71
24	49.1	41.5	7.5	1.9	1.28	○	48.7	43.0	6.4	2.0	1.30	○	12.2	70.7	17.1	0.0	0.78
25	37.7	50.9	9.4	1.9	1.13	○	43.0	47.3	8.4	1.3	1.22	○	12.2	70.7	17.1	0.0	0.78

4項目とも、保護者に関しては良好な結果であると考えられる。しかし、項目< 2 3 >< 2 4 >< 2 5 >は教員において要検討事項であるとともに、保護者に比べて教員のスコアが0.3以上低いこととに留意しなければならない。教員だからこそ気付く不十分さがあると推察できる。その具体的な内容を把握し、次年度での改善が必要である。

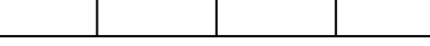
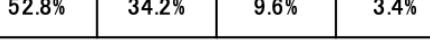
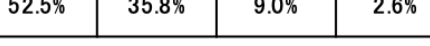
7. 2020 年度（令和 2 年度）生徒授業評価アンケートと結果分析

アンケートの評価観点は 10 項目で、生徒が受講している全教科・全科目を対象に実施した。生徒たちの集中力を考慮して、項目が多くなりすぎないように心がけている。また、アンケートの結果は、全教員に配布し、以後の教育活動に活かすよう努めている。結果に関しては、全体、中学校、高等学校に分けてまとめた。

分析は、A（よくあてはまる）を+2、B（ややあてはまる）を+1、C（あまりあてはまらない）を-1、D（まったくあてはまらない）を-2 として、各評価 A～D の割合に乗じたものを下欄にスコアとして示した。スコア 0.8 以上のものを良好と考え、それ以下のものを要検討事項と考えている。

授業評価アンケート 結果＜2020 年 1 月実施分＞ 全体・中学校・高等学校

全体

	A	B	C	D	2020年度 A+B
①授業に集中して取り組むことができている。	62.8%	30.1%	5.6%	1.5%	92.9%
					
②その授業で何が重要なかがわかる。	55.5%	34.1%	8.2%	2.2%	89.6%
					
③授業の進度やレベルが自分に適切だと感じる。	53.2%	35.6%	8.6%	2.6%	88.8%
					
④授業で与えられる課題の量は適切だと感じる。	59.3%	32.3%	5.8%	2.6%	91.6%
					
⑤授業に工夫（ICTやプリントの活用、授業形態など）が見られる。	54.1%	33.4%	8.6%	3.9%	87.5%
					
⑥授業の学習方法（予習や復習など）が分かる。実技教科に関しては、課題提出や技能向上に向けた取り組み方が分かる。	51.2%	36.1%	9.6%	3.2%	87.3%
					
⑦授業に興味・関心をもつことができている。	52.8%	34.2%	9.6%	3.4%	87.0%
					
⑧授業を受けて、知識や技能が身についていると感じる。	52.5%	35.8%	9.0%	2.6%	88.3%
					
⑨授業が自分の成長のために必要だと感じる。	56.7%	32.9%	7.5%	3.0%	89.6%
					
⑩先生の指導に満足している。	61.1%	29.9%	6.4%	2.6%	91.0%
					

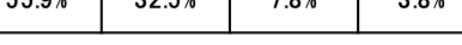
A：よくあてはまる B：ややあてはまる C：あまりあてはまらない D：まったくあてはまらない

中学校

	A	B	C	D		2020年度 A+B
①授業に集中して取り組むことができている。	51.6%	38.0%	9.3%	1.1%		89.6%
						
②その授業で何が重要なかがわかる。	48.3%	38.4%	11.8%	1.6%		86.7%
						
③授業の進度やレベルが自分に適切だと感じる。	48.1%	39.5%	10.3%	2.1%		87.6%
						
④授業で与えられる課題の量は適切だと感じる。	56.6%	33.0%	7.5%	2.9%		89.6%
						
⑤授業に工夫（ICTやプリントの活用、授業形態など）が見られる。	43.5%	38.6%	13.7%	4.2%		82.1%
						
⑥授業の学習方法（予習や復習など）が分かる。実技教科に関しては、課題提出や技能向上に向けた取り組み方が分かる。	41.8%	40.8%	13.4%	3.9%		82.6%
						
⑦授業に興味・関心をもつことができている。	46.6%	36.3%	14.1%	3.0%		82.9%
						
⑧授業を受けて、知識や技能が身についていると感じる。	44.7%	39.9%	13.0%	2.4%		84.6%
						
⑨授業が自分の成長のために必要だと感じる。	50.5%	36.0%	10.8%	2.8%		86.5%
						
⑩先生の指導に満足している。	56.4%	32.1%	8.8%	2.8%		88.5%
						

A：よくあてはまる B：ややあてはまる C：あまりあてはまらない D：まったくあてはまらない

高等学校

	A	B	C	D		2020年度 A+B
①授業に集中して取り組むことができている。	64.7%	28.8%	5.0%	1.6%		93.5%
						
②その授業で何が重要なかがわかる。	56.7%	33.4%	7.6%	2.3%		90.1%
						
③授業の進度やレベルが自分に適切だと感じる。	54.0%	34.9%	8.4%	2.7%		88.9%
						
④授業で与えられる課題の量は適切だと感じる。	59.8%	32.2%	5.5%	2.6%		92.0%
						
⑤授業に工夫（ICTやプリントの活用、授業形態など）が見られる。	55.9%	32.5%	7.8%	3.8%		88.4%
						
⑥授業の学習方法（予習や復習など）が分かる。実技教科に関しては、課題提出や技能向上に向けた取り組み方が分かる。	52.7%	35.3%	8.9%	3.0%		88.0%
						
⑦授業に興味・関心をもつことができている。	53.8%	33.9%	8.9%	3.5%		87.7%
						
⑧授業を受けて、知識や技能が身についていると感じる。	53.8%	35.1%	8.3%	2.7%		88.9%
						
⑨授業が自分の成長のために必要だと感じる。	57.7%	32.3%	7.0%	3.0%		90.0%
						
⑩先生の指導に満足している。	61.9%	29.6%	6.0%	2.6%		91.5%
						

A：よくあてはまる B：ややあてはまる C：あまりあてはまらない D：まったくあてはまらない

< 1 > ~ < 1 0 >

項目 番号	全体					中学					高校				
	A	B	C	D	スコア	A	B	C	D	スコア	A	B	C	D	スコア
1	62.8	30.1	5.6	1.5	1.47	51.6	38.0	9.3	1.1	1.30	64.7	28.8	5.0	1.6	1.50
2	55.5	34.1	8.2	2.2	1.33	48.3	38.4	11.8	1.6	1.20	56.7	33.4	7.6	2.3	1.35
3	53.2	35.6	8.6	2.6	1.28	48.1	39.5	10.3	2.1	1.21	54.0	34.9	8.4	2.7	1.29
4	59.3	32.3	5.8	2.6	1.40	56.6	33.0	7.5	2.9	1.33	59.8	32.2	5.5	2.6	1.41
5	54.1	33.4	8.6	3.9	1.25	43.5	38.6	13.7	4.2	1.04	55.9	32.5	7.8	3.8	1.29
6	51.2	36.1	9.6	3.2	1.23	41.8	40.8	13.4	3.9	1.03	52.7	35.3	8.9	3.0	1.26
7	52.8	34.2	9.6	3.4	1.23	46.6	36.3	14.1	3.0	1.09	53.8	33.9	8.9	3.5	1.26
8	52.5	35.8	9.0	2.6	1.27	44.7	39.9	13.0	2.4	1.12	53.8	35.1	8.3	2.7	1.29
9	56.7	32.9	7.5	3.0	1.33	50.5	36.0	10.8	2.8	1.21	57.7	32.3	7.0	3.0	1.35
10	61.1	29.9	6.4	2.6	1.41	56.4	32.1	8.8	2.8	1.31	61.9	29.6	6.0	2.6	1.42

全体的に良好な結果であると読み取れる。ただし、授業に関しては常に改善を促し、教員個々の研鑽が必要である。今回の結果から改善点を読み取るならば、中高ともに項目< 5 > < 6 > < 7 > < 8 >については、他の項目と比べてスコアが低いため、生徒が該当項目に対して良好な実感が得られるような授業を展開することが必要であると考え。

8. 2020 年度（令和 2 年度） 自己評価及び次年度の課題と改善策

評価項目（1）目指す教師像の実現	自己評価
具体的方策① モチベーション・マネージメント制度を振り返りさらなる意識向上を図る。 <活動実績と自己評価> モチベーション・マネージメント制度導入 2 年目となり、初年度の問題点を改善し、FF シート（評価シート）に「目指す教師像」の自己評価項目を設定した。別途行った教員アンケートにより、目指す教師像全項目の平均は「意識が向上して、取り組みも大きく改善できた」15.8%、「意識が向上して、取り組みも少し改善できた」71.6%、「意識は向上したが、取り組みはあまり改善しなかった」9.8%、「意識の向上も、取り組みの改善もなかった」2.8%という結果であった。評価指標としていた「各項目の評価向上が教員 50%以上」に関しては、各項目とも達成することができた。 <次年度の課題と改善策> モチベーション・マネージメント制度を引き続き改良し、更なる教員の意識向上と行動の変容を図る。	A
具体的方策② 教員研修を実施し、意識から行動への移行を図る。 <活動実績と自己評価> 8 月と 10 月に東京大学名誉教授 市川伸一先生を招いて「新教育課程に向けての教育改革の動向」「教えて考えさせる授業（OKJ）」の教員研修を実施して研鑽を行った。年度当初の校務分掌の読み合わせ、FF シート改良時における再確認、年度中間・年度末における自己評価アンケートによる意識付けを行なった。上記同様、評価指標は各項目とも達成することができた。 <次年度の課題と改善策> 引き続き、教員の研鑽につながる研修をその時に必要と考えるテーマで実施する。次年度は「生徒指導」や「評価」についての研修を実施したい。	A

評価項目（２）教育コンセプトの実現	自己評価
具体的方策① 学校案内パンフレット・ホームページを通して明確に打ち出す。 <活動実績と自己評価> 予定通り、昨年度に引き続きパンフレットやホームページを通して、教育コンセプトを明確に打ち出した。 別途行った教員アンケートでは、全項目の自己評価平均が「意識が向上して、取り組みも大きく改善できた」14.7%、「意識が向上して、取り組みも少し改善できた」74.8%、「意識は向上したが、取り組みはあまり改善しなかった」7.8%、「意識の向上も、取り組みの改善もなかった」2.7%という結果であった。評価指標としていた「各項目の評価向上が教員 50%以上」に関しては、各項目とも「意識が向上して、取り組みも少し改善できた」までを含めて達成できたと言える。 別途行った生徒によるアンケートでは、全項目の自己評価平均は「以前に比べて意識することができ、かなり身に付いているように感じる」26.0%、「以前に比べて意識することができ、少し身に付いているように感じる」57.3%、「以前に比べて意識することができたが、身に付いているようには感じない」13.4%、「以前に比べて意識することはなかったし、身に付いているようにも感じない」3.3%という結果であった。指標としていた「各項目 70%以上」に関しては、「以前に比べて意識することができ、少し身に付いているように感じる」までを含めて達成できたと言える。 保護者による学校自己評価アンケート該当項目平均は「よくあてはまる」29.5%、「ややあてはまる」57.4%、「あまりあてはまらない」11.8%、「まったくあてはまらない」1.3%という結果であった。評価指標の達成に関しては、「やや当てはまる」までを含めて指標としていた「該当項目 70%以上」を達成できたと言える。 <次年度の課題と改善策> 令和4年度からの新しい教育活動における教育コンセプトの見直しを考慮して、学校案内パンフレットやホームページでの明確な打ち出しに関しては、慎重に検討する。ただし、在校生の意識づけと習得に関しては現行のコンセプトを実施していくため、Classi による自己評価アンケートなどを利用して、更なる向上を目指す。	A
具体的方策② 日々の SHR、学年集会、全体集会、保護者会を通して浸透を図る。 <活動実績と自己評価> 今年度は、学年集会、全体集会、保護者会等は、新型コロナウイルス感染対策の観点から実施を見送った。日々の SHR や朝礼講話などを通して教育コンセプトの浸透を図った。評価指標に関しては、上記具体的方策①と同様に達成できたと言える。 <次年度の課題と改善策> 各学年の特色作りの一環として、どのように教育コンセプトを実現するか検討し、実践していく。	自己評価 B
具体的方策③ 教育コンセプトを実現させるために、各行事と結びつけ、振り返りを実施する。 <活動実績と自己評価> 各行事を企画する際に、必ず教育コンセプトが盛り込まれるように要項に明記した。各行事の振り返りは担当部署が担当して実施したが、教育コンセプトの実現がどうだったのかということまで言及できなかった。評価指標に関しては、上記具体的方策①と同様に達成できたと言える。 <次年度の課題と改善策> 引き続き、各行事と教育コンセプトを結びつける。課題である振り返りについては、振り返りアンケートなどを実施する際に、「教育コンセプトを意識して取り組むことができたか」「教育コンセプトに掲げた力や心、姿勢などに成長があったと感ずることができたか」などの項目を盛り込みたい。	自己評価 B

評価項目（３）ICT の活用充実	自己評価
具体的方策① iPad を教員に配当し、iPad や Chromebook を使った授業を実践し、研究または公開授業を行う。 <活動実績と自己評価> 今年度は新たに教員用の iPad を 20 台購入し、各教員に配当した。3 月には I C T を利用した校内研究授業も行った。 教員による学校自己評価アンケート該当項目は「よくあてはまる」17.1%、「ややあてはまる」70.7%、「あまりあてはまらない」12.2%、「まったくあてはまらない」0%という結果であった。 保護者による学校自己評価アンケート該当項目は「よくあてはまる」23.4%、「ややあてはまる」58.7%、「あまりあてはまらない」15.4%、「まったくあてはまらない」2.6%という結果であった。 別途行った生徒による自己評価アンケートは「ICT(iPad や Chromebook など)をかなり学習に活用できている」26.1%、「ICT をある程度学習に活用できている」52.6%、「ICT はほとんど学習に活用できていない」17.0%、「ICT は全く学習に活用できていない」4.3%という結果であった。 評価指標は、「教員による該当項目 70%以上」「保護者による該当項目 50%以上」「生徒によるアンケート 50%以上」としたため、全指標ともに目標を達成できたと言える。 <次年度の課題と改善策> ICT 教材の導入一覧を作成し整理を行って、より効果的な学習方法を検討する。また、「学校評価アンケートと結果分析」に記載したように、中学校においては各教科における I C T 活用方法についての検討する必要がある。	A

評価項目（４）各コース毎の学習習慣の改善・成績向上・進路実績向上	自己評価
具体的方策① 学習習慣についてClassi アンケートにて到達度自己評価を行うことで意識向上を図る。 <活動実績と自己評価> 今年度は、学習習慣として生徒に次のような自己評価アンケート項目を設定し、年度中間及び年度末の２回の自己評価を実施した。アンケート項目は「授業中の姿勢について」「授業の宿題、予習、復習の取り組みについて」「受験や自分に必要な教科だけでなく、どの教科も幅広く学び、ものの見方や考え方を広げた方が良いという考え方について」である。結果は「以前に比べて意識し、大いに改善（または維持）できている」29.2%、「以前に比べて意識し、少し改善できている」56.9%、「以前に比べて意識しているが、改善できていない」12.2%、「以前に比べて意識しておらず、改善もしていない」1.7%という結果であった。評価指標の達成に関しては、「各項目の評価項目の評価向上が生徒全体の 70%以上」を達成できたと言える。 <次年度の課題と改善策> 今年度に引き続き、評価指標の達成を目指すのとともに、更なる学習習慣及び意識の向上に努める。また、前述した学校自己評価アンケート及び生徒授業評価アンケート結果分析をもとに、詳細課題の改善を実施する。	A
具体的方策② 英検・GTEC スコア・漢検の各学年における指標を示し、生徒が率先して学習に取り組む姿勢をサポートする。 <活動実績と自己評価> 各学年における英検・GTEC スコア・漢検の指標を英語科・国語科より示し、それぞれの目標達成に向けて生徒の学力サポートに努めた。 英検の各学年における評価指標と達成結果については次の通りである。中１）４級 80%目標達成できず、中２）３級 50%目標達成、中３）３級 80%目標達成、高１）文理Ｓ・文理コース 準２級 50%目標達成、その他コース ３級 60%目標達成できず、高２）文理Ｓ・文理コース ２級 60%目標達成、その他コース 準２級 40%目標達成できず、高３）文理Ｓ・文理コース ２級 80%目標達成できず、その他コース 準２級 60%目標達成できず、という結果であった。 高校 GTEC スコアにおける評価指標「スコア平均を各学年 40 以上上昇」については、各学年とも目標達成することができた。 漢検の各学年における評価指標と達成結果については次の通りである。中１）４級 50%（５級 100%）目標達成、中２）４級 100%目標達成できず、中３）文理Ⅰコース ３級 100%目標達成、文理Ⅱコース ３級 50%目標達成、高１）文理Ｓ・文理コース 準２級 50%（３級 100%）目標達成できず、高２）文理Ｓ・文理コース 準２級 100%目標達成できず、その他コース ３級 100%目標達成できず、高３）文理Ｓ・文理コース ２級 50%目標達成できず、その他コース 準２級 50%目標達成できず、という結果であった。 <次年度の課題と改善策> GTEC においては引き続き更なる向上に努める。英検については、中１の４級指導、高校の各学年における文理Ｓ・文理以外のコースの目標級の指導、高３文理Ｓ・文理コースの２級指導の検討を行い、目標達成に向けた改善策の実施が必要である。漢検については、中３以外の学年において目標が達成されていないことから抜本的な指導の見直しが必要である。全体の改善策としては実施時期の再検討、学年と各教科の目標達成に向けた連携についての検討を実施する。	B
具体的方策③ 現状より一步上を目指した進路を実現するための学習指導と進路指導を担任と教科担当者が密に連携して実現する。 <活動実績と自己評価> 「国公立大」昨年以上の合格者数として 7 名を評価指標としていたが、目標達成は 1 名(大阪大学)であった。「関関同立」は 30 名の合格者数を評価指標としていたが、結果としては 13 名(内 1 名既卒生)であった。「産近甲龍・三女子大」は 30 名の合格者数を評価指標としていたが、結果としては 34 名であった。 <次年度の課題と改善策> 進路指導部及び関係者で入試結果分析を行うとともに、各種模試の取り組み方について検討し、改良及び実践を行う。また、各進路説明会、各種模試、個人懇談など、大学入試までの流れの一覧「進路マップ」を作成し、系統的な進路指導を実践できるような体制を構築する。	C

評価項目（５）次期学習指導要領に対する教育課程の検討・立案	自己評価
具体的方策 委員会を設置し、教育課程を立案する。 <活動実績と自己評価> 教育課程検討委員会において、新学習指導要領に対応する高校の教育課程を完成させることができた。評価指標としては「教員による学校評価アンケート該当項目 70%以上」「保護者学校評価アンケート該当項目 70%以上」としたが、該当項目の設問が「大学入試改革に対応した適切な指導（英語四技能・キャリアパスポート等を含む）が行われている」としたため、正確な評価指標となっていないが、それぞれの「ややあてはまる」以上の割合は教員 97.5%、保護者 82.6%といずれも目標を達成している。 <次年度の課題と改善策> 次年度は、高校の新教育課程の微調整を行うとともに、在校生及び中学校の教育課程の改訂を早急に行う。	A

評価項目（６）入学者数の増員	自己評価
具体的方策① 本校の魅力を整理し、各種説明会、入試関連行事等でアピールを行う。 <活動実績と自己評価> 別途学院として実施した経営改善計画において、本校の魅力を再整理し、入試関連行事でアピールを行ったが、結果から考えて十分であったとは言えない。また、コロナ禍の家庭への経済的な影響を考慮して、建学の精神に通じる「入学金全員免除～学びを守る支援～」を実施して募集活動を行った。結果として、入学者数は中学 31 名、高校 109 名と評価指標としていた中学 40 名、高校 150 名を下回った。中学は評価指標を下回ったが、前年の 18 名からは大きく前進した。特に外部受験生の増加が目立ち、入学金全員免除の効果があったと考えられる。高等学校においては、学校選びは保護者よりも本人の意向が強くなるため、入学金全員免除の効果は薄かったと考えている。高校は引き続き、内部進学生数の減少と併願生の減少が募集減に大きく影響している。 <次年度の課題と改善策> 令和 4 年度の入学生から共学が始まる。この共学化にあわせて、制服と教育内容の刷新を行う。これらが生徒や保護者から求められるものとなるように詳細を詰めて検討し、広報していく。	C
具体的方策② 高校の入試基準や中高の奨学生制度を改変する。 <活動実績と自己評価> 前年度の振り返りを行い、高校の入試基準の見直しを行った。また、部活動奨学生制度については各部活顧問と意見交換を行い、制度改訂を行った。具体的方策①で示したように、入学者は評価指標を下回る結果となったが、部活動奨学生制度の見直しは一定の効果があったと考えている。また、初めて、中学校の外部入学特待生制度や部活動奨学生制度を希望する生徒に適用できたことは今後に期待できる。 <次年度の課題と改善策> 令和 4 年度の共学化に向けて、部活動奨学生制度を適用する部活動を増やし、募集活動の充実と部活動強化に努める。	自己評価 B
具体的方策③ 塾・中学校まわりの改善 <活動実績と自己評価> 塾まわりに関しては担当者を増員し、中学校まわりに関しては新たな教員を任用して募集活動の改善を実行した。具体的方策①で示したように、入学者は評価指標を下回る結果となったが、中学校においては、これまでの塾まわりの積み重ね及び新たな取り組みによって入学者数を増やすことができたと考えている。 <次年度の課題と改善策> 今年度より設置した募集広報連絡会を更に充実させ（関係参加者の増員、回数の増加）、各渉外担当及び入試広報部と管理職との連携を図り、募集活動の改善を行う。	自己評価 B
具体的方策④ 各種イベント、広報の改善 <活動実績と自己評価> コロナ禍であったが、感染症対策を徹底してできる限り従来に近い形で募集イベントを実施した。高校のオープンキャンパス参加者数は 316 人だったので昨年度 272 人に比べて増員することができた。しかし、説明会の参加者延数は 85 人で昨年度の 171 人に比べて大きく減少した。中学のオープンキャンパスと説明会は同日開催であり、参加者数は 84 人だったので昨年度 96 人に比べて少し減少した。 <次年度の課題と改善策> 高校の入試説明会の参加者が少なくなった原因について（オープンキャンパスから入試説明会につながっていない原因を含めて）検討し改善する。イベント参加は 1 人 2 回を目指し、そのうち 1 回は必ず説明会となるようにする。また、ホームページの改訂、SNS を利用した新たな広報活動を実践する。	自己評価 C

9. 学校関係者評価

(1) 学校関係者評価委員会の構成

後援会代表 2 名・愛友会（同窓会）代表 2 名
中高教員代表（校長・教頭） 2 名 計 8 名

教育会代表（高校副会長及び中学副会長） 2 名

(2) 開催日時

令和 3 年 8 月 21 日（土） 10:00～11:30

(3) 評価のために使用した資料

2020 年度 学校評価報告書原案

- ・学校目標と具体的方策及び評価指標
- ・学校評価アンケート（保護者・教員）と結果分析
- ・生徒授業評価アンケートと結果分析
- ・自己評価及び次年度の課題と改善策
- ・2021 年度の方針（教育改善 PDCA サイクルのイメージ）

(4) 学校関係者評価委員会のまとめ

評価項目（1）目指す教師像の実現

- ・教員と生徒のコミュニケーションはしっかりと取れている。
- ・昔に比べて生徒数が減った分、しっかりとコミュニケーションが取れると考える。
- ・勉強と部活動の両面で成長をサポートしているという実感がある。
- ・生徒が家庭で、学校や教員の良い話を日常的にするような関係を築いてほしい。

評価項目（2）教育コンセプトの実現

- ・教育コンセプトはホームページなどにもしっかりと掲載されており、分かりやすい。
- ・全体的に良いコンセプトとを感じるが、もっと具体的なものにしたいと考える。

評価項目（3）ICT の活用充実

- ・学校から ICT 機器を使って課題の配信などもあり、有効に活用されているように感じる。家庭でも ICT 機器を使って友人と共同作業などができることも魅力である。
- ・生徒たちは自分たちで上手く使いこなしている。時代の流れもあり、紙よりも使いやすくていいのではないかと感じる。
- ・授業や学習に使うことは良いが、娯楽としての動画視聴や SNS など偏った使用には注意が必要である。

評価項目（4）各コース毎の学習習慣の改善・成績向上・進路実績向上

- ・英検や漢検などの資格取得に関しては、上手いかなかった場合でも、その後にサポートする手厚い指導がなされている。
- ・資格は就職時にも役立つので、在学中に少しでも上位のものを取得できるようにする必要がある。
- ・英語に関してはスピーキング力が重要であり、しっかりと伸ばせるような指導が必要である。
- ・進路実績を向上させるには、部活動と学習にしっかりとメリハリをつけられるような環境づくりが必要である。特に、高校では部活動から学習にシフトする時期を明確にすることが重要である。
- ・文理 S・文理コースは、学習にもっと比重を置いても良いのではないかと考える。文理 S・文理コースは、上位大学への入学が必至である。

評価項目（5）次期学習指導要領に対する教育課程の検討・立案

- ・新しい教育課程においては、思考力、判断力、表現力などの学力観が重視されているが、知識などの基礎もしっかりと身に付けさせなければならない。
- ・教育課程の設定だけでなく、適正な評価方法（特に表現力など）の設定も重要である。

評価項目（6）入学者の増員

- ・高校の併願受験生などに関しては、塾への更なるアプローチが必要である。
- ・入試関連イベントでの来訪者対応は改善の余地がある。特に中学受験は保護者の見目が厳しく、少しのミスで気持ちが離れてしまうことがある。プログラムの詰め込みによるミスが起きないように、各プログラムの見直しが必要である。

10. 2021年度の方針（教育改善PDCAサイクルのイメージ）

2021年度（令和3年度）教育改善PDCAサイクルのイメージ

